

「猿額（さるひたい）」

織田雅道

（おだがどう）

私は三歳の時に洗礼を受けた。
いまから半世紀も前のことだ。
それはキリスト教で言う幼児洗礼だった。
母は、私の首根っこを力ずくで掴み、頭を
牧師に差し出した。
牧師は、その冷たい水を幼児の小さな頭に
落とすのである。
それらは頭蓋骨の表面を流れ、襟の中に吸
い込まれ、そして背中や胸を汚く濡らし、濁
水となつて股間に達し、やがて蒸発する。
それは気持のいいものではなかった。
子供の私は大いにむずがった。
このことだけが鮮明に記憶としてあるの
だ。
私がその後の人生において、神を冒瀆する
ことをやめない所以はこの時の記憶に在る。
だが教会には皆勤した。
母の神への傾倒で、好むと好まざるとにか
かわらず、そういった環境に長く棲んだ。
私は小さい頃から牧師になるのだと決めて
いたふしがある。それは小学校の時の作文に
いくつか散見されるからだ。また中学生の時
にはクリスマス会でイエス・キリスト役を演
じたりもした。
母には理想の息子だったと思う。

キリスト教では「人間は神の創造物」とさ
れている。だからダーウインの進化論には牙
を向ける。それはキリスト教を根底から覆す
からだろう。

いまなお長い闘いであるらしい。

この学説は「人間は猿から進化したもの
だ。」としていることはよく知られている。
ごく最近までアメリカのある州では学校で
進化論を教えるはならないという法律があっ
たくらいだ。

私は自分を猿と思ったことはない。

私は猿ではない。人間だ。

もし人間のルーツが猿であるなら私も猿で
あると認めなければならなくなる。それは勘
弁してもらいたい。何故なら私は猿ではない
からだ。
猿と思わなければならぬほど、私は自虐
的ではない。

だが最近、ちょっと待てよ、と思いはじめた。
私のマンションには等身大の大鏡がある。
風呂に入ろうと脱衣する時、なんとなくそ
の鏡を見る。
そこには肋骨の浮き出た薄い胸板から小枝
のような上肢がぶら下がり、二本のつつかえ
棒が、幾分張り出した腹を支えている醜い身
体が映る。あたかもそれは棺桶から立ち上が
った屍を思わせ、ぞつとするのだ。

そのあと、私は鏡面に顔を近づけ、自分の
顔をよく見ることにしている。そこで、ある

不安がもたげてくる。
私の額が、加齢とともにだんだん狭くなっ
てきているような気がするのだ。
いわゆる猿額（さるひたい）だ。
やつぱり猿だったのかと思う瞬間だ。
妙な気分だ。
額の広い狭いが、知能あるなしを現してい
るといふのは本当なのだろうか？
確かに猿額は間抜けな顔であることは間違
いない。人間は猿に限りなく似ていることを
改めて突きつけられる。
ひよっとして私だけが猿なのかも知れない
が、私は、人間と、猿とは別物だと思いたい。
私を創ったのは神だと信じることがクリス
チャンになれる道なのに、私が実は人間では
なく猿かも知れないと思い始めることは神へ
の最大の冒瀆になる。
あれから五十数年も経った今も、あれこれ
と逡巡してしまい信仰告白が出来ないままで
いる理由のひとつなのだ。
私は幼児の時にすでに儀式は終えている身
だ。神に向かい「あなたの存在を信じていま
す。」と、ただ一言、言えばいいのに。それ
が出来ない。これらは多分、彼らが声高に言
う、私は「迷える子羊」なのだろう。
鏡の中の猿顔に出会う度、私は、私から
神が遠のくのを知らされる。
キリスト者になるにはもうしばらく時間が
かかりそうだ。